

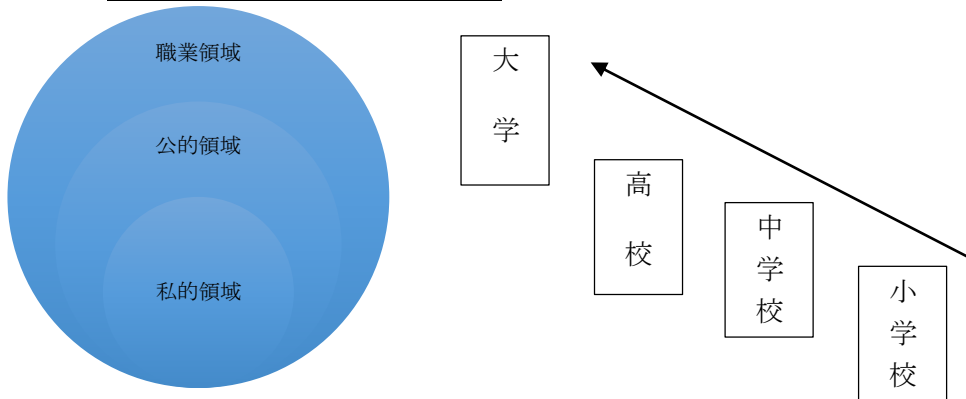
英語新カリキュラムの概念

新カリキュラムの策定にあたり、本学の教育の原点「良心教育」、教育理念「キリスト教主義」「国際主義」「自由主義」に基づいた人材育成を前提に考えました。その上で、新カリキュラムは、外国語運用能力の多面性、学習者の多様性に鑑み、それぞれの学習者にとって意味のある学びとなるような授業を展開するべく、ヨーロッパ言語参照枠（CEFR: Common European Framework of Reference for Languages）及びヨーロッパ言語ポートフォリオ（ELP: European Language Portfolio）における以下の外国語の学習・教授・評価に関する考え方を基軸としています。

- ・職業選択を視野に入れた体系的カリキュラム
将来の職業で使う英語を視野に入れ、「一般英語から各分野で求められる英語へのつなぎの段階」までを含んだ体系的なカリキュラムとなっています（図1参照）。
- ・複言語主義（Plurilingualism）
言語間の優劣が存在しないことを前提とする複言語主義（Plurilingualism）に基づく言語外国語教育を基本としています（図2参照）。
- ・外国語運用能力の多面性
外国語運用能力は、テストで測定できる「基本的な能力」に加え、「異文化体験」、「外国語学習目的の可視化」、「外国語能力の自己評定」など、自律した外国語使用者としての資質及び能力を含んだ多面的な性質を持つと位置付けています。
- ・外国語学習能力の多面性
外国語学習能力は、実存的能力・叙述的能力・技術とノウハウが組み合わされたものであり、「～ができる」というのは「知識として知っている」、「そのやり方をわかっている」、「置かれた状況で対応できる」などから成ると定義されています。
- ・「ソーシャル・エイジェント」の育成
学習者を「ソーシャル・エイジェント」（social agent：社会的に行動する存在であり、与えられた条件・環境・領域の中で課題を遂行する社会の成員）とみなしています（図2参照）。

上述の教育理念、及び言語教育理論を基盤とした、体系的にまとまりのあるカリキュラムと教育が社会に貢献する人材を育てると考えています。

図1 外国語使用領域（英語の場合）



CEFR では「どの領域で、何が、どの程度できる」という基準で語学力の程度が多面的に記述・定義されており、最新の小学校・中学校・高等学校の指導要領でも私的領域（家族、自身、友人との言語使用）、公的領域（外出した際の言語使用、クラスでの発表、多くの読者を対象とした原稿など）まで言及されている実態がある。図1は、大学で職業領域（就職した仕事場の言語使用）も含めた段階的な発達を示したものである。

図2 CEFR および同志社大学の理念に基づく外国語運用能力及び教育に関する理念図



CEFR では、social agent の育成を大きな目標に据えている。図2は、同志社大学の教育理念を踏まえた人材育成を目指し、外国語運用能力と教育のありようを提示したものである。